芸州菊文集

坤

へ 5
4661
2

門へ5
號4661
卷2

芸村文集 坤

一 春宜集序
一 五車反古序
一 小安弱仙序
一 大祇白選序
一 陽口塚序
一 芦陰白選序
一 鬼貫白選序
一 夏宋序
一 むらを序
一 桃雪序

昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏寄贈

一茶雪舟序　一茶雪舟序

一俳諧正名序

芭蕉文集評

洛　竹巣月居　跋

湖東支獨亭忍雪

洛　醉菴其成　輯

春泥集序

柳灌翁の逝去を悼集して序を乞る一日余りて春泥庵
石波ふ洛西の別業を訪ふ
いつ寄る俳徒を問ふ曰俳諧八俗語

を用て俗を教る法事人倫を教かて
俗を自由教俗の法最かしかの何とし
乃後世の集手段辯をゆとしたの
則俗俗後にして教俗ノ別なる法
教語す部同世界ところの雖俗
乃法甚方言なるとらへともなほ先
二事をもつて教ることしてもて
むるものに教ることを法とうら
は我もちろん自然に化して俗を

教ることを乃捷徑あるを中ちて曰法
を教師ることしるもつて法を教す
世ることもへうして法教能尚書法と
俗世といふる甚致を異の法さる我
俗俗を教て法を法とし云近道な
ほよあらんやを曰書教之書俗論
あるを曰西志俗無他法多讀書則
書卷之氣上升而市俗之氣下降矣
學者其慎旃哉之道の俗を書

たるも筆を採りて書を請ひむ況詩
と俳句と何のをしへよりの事あらん
や況則悟寸或曰又問ひて俳句
乃教ふる名と門戸を別個なるもの
いつれの門もそなへて其堂奥をく
かいんや著曰俳句の門戸なし只是
俳句門をなすを門とする而已論曰俳
句不分門戸門戸自在其中俳
句かくのごとくしてはじめて法を立てしも

を一囊中の貯へ自其能力を撰び
用ひて出ひ唯自己の胸中いんを
顧るのみ他の法なし志を立てと
ひとをなす能ひて其人を変ずるみな
らずまた其人の所為をもしたがひ
其人をしてなしものを進ませや名其角
を名乗る光雲を付ひ素堂を得む
鬼貫ふ伊丹に出四老ふをもてそ
はく市城名利乃域を離れ林園

み捨てひとみあるみてくけ一酒を酌て徒
笑一白紙得るるよいかを未用意をも
ふかくのうとくすふるる日く或日四老
の気すゆ遊賞粧懐けるのさとし
眠をつ年て世苦吟一句をなて眼を開
く忽四老乃所主を失さらさつつ
きの所に仙化して去るや恍として
一人自ら行むはたる香風に和月光
あに浮ふ呂を乗ふ仙化の郷なるを後

笑すはひとみ我社稷ふ海て白を社
さく数千最寄の秋去を花を非年す
家日寄来さ去ら其間ゆ一とつも
ふとふ人情世態を尽されいまさ寄
乃自ら倒ふもふ要ふのてゆなるさる
みはるを待ふみ寄社を来ふ海ふ
新元白を新さるうさくさよ俗日雪ふ
をあさむきて堅孤独ふりさふれ
画ふ呂法を画屏とふさ寄い則

仰慶なるべくのまたてくさの書を置て
進て他岐を顧さてはひみ仰仏の住境
を拝むべきをもむをして一旦為ものて
起つてはるる形容りにかた風葉
はるべへかしに預め孫要の期をたし
案を拝てをるを拝て回恨らくは唐のも
流りをはるくをはるをとを言孫て
涙潸然として泉下の帰一ぬ案こなる法
下回我仰仏西をを示仰仏西をと

大のをとを拝宝落話をの無るの中
又仏をはるをを拝年落話は余う
九年の住年をはるてるくもらくの人と
付海ををを解説をるものの
仏又甚又ををををして此集の
ををるををて住るを有ひみを見て
波るう清敬をるるや其ひをるを
ををつてをの自るの仏るも無をを味
命しうの帰の住をを行うみるる年に

まをしうけたまはりて後ほどの事ども
ふ所にて三首萬村ち

芦陰白鷺

むらゝ丹波のあるたなる陰をまもる
おきなみのあらまるそのたまうとうて
むらさきをかくしてゆゝしさ云んうち
なゝ人まをを百貫ばかりんとゝ
るおまとゝやゝかくて、たるあるとひを

おさいあるひなかきるをあゝしと
おをひて、百貫ばかりえまをとてうら
ゝて、おうるまをみうれるなりしを
うつうた鶴あゝまをぬたまをあを
まゝとゝとゝいているしさるをみうに
をうひきをたるまをあるをまをうるる
なるもあをうもゝ兎うんうんひゝ人ともを
をるおうをひたゝたるゝ形ゝなるをるを
されや大鳥るうに陰芦陰きう稲ようを

ものを出さんとして高きをうみもむ
やうに思ひ移ハ出さんもあつなんいなく
ものを作者のきそこんあるもの遺稿
出て還て生おのの詩巻を減するもの
さてこのかゝる大魚のてもこゝろを移ス
維陽の一古墳とゝるをてこの門の裏雖
なるしされいろの住る秀吟ハくあの
れの勝負をたまきら巻の出る如せ
んやさてきて移を出てらのこゝろ

高よ例ふさてなるれ門流皆さ
うみこる移をあつめてれ墨こ所してて
移言さし免脚刺半ハみいるもつて
てゝこゝ所をとゝやみるゝ世さつゝ行
みてやむ金こゝして那てその世ハ
閲さこ漢して日巻移ものてゝこ
漢二移のこくいよくこの文雅こ
そとしを大魚のこの巻ハ
そのえをかるこのこゝ門流

しるしたるものをみるに、とてもかの

五車反古書序

雅馴又の十三回ニ、とまつるに、まゝえ
らびて五車ニするなどつゝみなるべき皆ある
ことのあしあり又のあることを乃自ヨリ初て
まうけしこと。年をしるしたる巻ものゝ
ゆまあり。ものゝ文のたるものゝとをのゝ
こゝろ代年の海とよりて人まとゝ旅宴

の待乃ゝ家の繁昌をあらはしたるものなれ
ば、王ゝ記のすゝめ、ものゝ名をかゝ自の和ゝと
いふ年をとゝ、ゝ、ゝ、ゝ三隅の法乃ゝ
あるとみるをゝ、ゝたるゝ所、ゝ世ゝ
ゝ、ゝとゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

なるまぬ。爲ちを今まゐ之とゝむ今まゐ爲ケ
ナレて自ら能きて新しくあらはす
まゐの業を解するさとしひとゝ
あるを見てゝ之さなる出られこと
ロロのちまるを知らんをうゝみを
たゝゝ無ゐも心無自ゆりを待て
終を以ゝ之なゝ所ゝ之なゝ無ゝ
ゆゝゝ〳〵みゝ自ゆりを待て終ゝ
後ゝ之ゝ雖ゝ之ゝ爲ゝ之ゝ事ゝ無ゝ

きを時て穴稿ゝ子稿を奪ひ去る
余もみゝ之ゝ化ゝそのゝゝを去て
余ゝ之

鬼貫句選跋

立子の風韻を主ちたるものゝゝとも
ゝ御法をかゝるへゝ法ゝゝるゝと
ゝゝ自のゝて其ゝ角鬼を書ゝ堂去来
鬼はゝなゝ其角鬼を於のゝ

其集あるを素堂ハもとよりの句なく
去来ハ其のつゝ句をのきも法をよく
学ぶるもとより作者の真意
をよくよみて世に作る句をれなる
ゆゑ蕉翁を敬とし古今の事を
漢きてもちゐるこゝろをよく集
べて教ゆる句をいるを学ぶと浮海
みゝして魚をとらむるをもとし
もまつるものいくほとゝ侍んさを

鬼けらる筆とゝ絶てもやく世の
好生ゝくゝ世とゝ伝ふ所ハ
叔もとハ文字屋自笑也

平安二十歌仙序

蕉翁去来一紙両筆書ハ句
某ヨリ菊屋二傳来ス屋又長
松下随古二議ル屋ハ古ヶ叔又
ナリ向某ハ去来カ通家也

右一紙両葉乃ふるとそて長松下乃
紅葉るとそ乃ん みてゝ乃み稀首乃もの
なるを其ゝ此 其乃末のさゝ〻おき作者
みて崔ゝ乃もこのを乃て歌きり是
と乃ふやゝ乃れ乃ゝてさゝめる人乃
かゝる歌なんとをんと事やすゝ
ゝ乃きを自らの猿ゝとゝ乃かて
やゝ乃のさゝゝを乃ゝを乃ゝ乃る猿猿
乃ゝまゝゝ乃ゝ侍をさて乃ゝて乃ゝ也

かゝゝなゝひゝ歌を事を乃る也
さゝゝゆゝゝゝや侍ゝ乃ゝ歌ゝ
ゝゝゝく事のゝゝゝと猿並山みて
ゆゝゝゝ乃ゝ一首左紙嘯山松下を後
ひゝこの書をひゝゝひゝて乃ゝ人
乃ゝゝゝ源ゆゝなるゝゝゝゝゝゝ
侍れいす 詞侍者の侍ゝゝ事ゝ
ゝて三時乃義端ゝなゝゝゝ
乃ゝ席をかゝゝゝゝゝゝ猿侍

ぬさとてあれと其角の月の雪く
体をも倣いて山嵐雪の花をくらいなる
ゆくをも撫きすまして其の世をとて
きやを葦つとやくん俗をもたれ
ゆすぶるもあしたたるさくらの
さやくるれきひ新なる花をたゝみ
たとふかるゝもやうすこるの
意をはるとゝるふ俗にもあし所
そくのゆすさらもいとるもとゝるる

乃ちにて搭仙客の棚架をおすて
なるを思くるをあること吟なるをふん
ゝるの出をあくとゝ存して三ゝを催す
ものゝて三菓散人蕉村書

宴樂序

屋百畝の主人早ゝをまねる備
ゝをゝりて宴す殘雪玉盤糧唐駝
山峯窮山之珍竭水之錯尽くく具せ

さとらずきてたなし日千ちも数年又
いつとてうく蝿食さて及ぶ代蠹
ほうらむ便くたる腹中又雅の貯
ふきさて七を絡又鈴をふち御教を
らうて待眠又搗へ屋又おしり月又
嘴く豈仙ふの歡み議る竜りんや
月の白を吐てあうさん燈の暖

六祇句選跋

七祇百而小言すらくまるみよしならず
清と云へ八ちるとなるる案とそんさ
俤紙のさひしみふれ焦竜るるみ
そらにさいう甚るの三解そそ
く野みて淺杵を鍼る磨し題
滴の石を穿つとしてもけて系業の
辛苦時も七あるなる毎かるとるもわ
たるとさて毒を及ると仏を和む
又もかうしあるぬらくくも世白

さるとされいに紙ゝ白集の哥稿をも
かさねるこゝあるをおもひてしに人のイ
めるを自たゝにたゝへおるゆゑゝや
いせのたゝ世秋のわき千しもふんて
をたゝをさして家寧ゝとしてゝとゝ未
いつるこゝをとゝおるるまにあれと
なをはのはゝのいつれゝ月はをさも
ゝゝねゝ年ゝゝ家左の撰者も
銀つゝまゝろまゝひてゝまゝやゝたゝ

らみはるゝもあゝしかゝ年二ゝ
ゝいふゝゝゝたゝをゝ新はゝゝゝ大
かゝたゝゝあゝゝゝゝゝゝゝ四
乃ゝゝゝゝとゝに歩ゝる五ゝ家のゝ四
をゝゝゝゝて和稿ゝ歌ゝ未にゝ古
みて世ゝひゝゝし二稿三稿ゝゝゝ
ものゝ年をゝゝてゝものゝくゝ自ゝわ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ二ゝゝゝけ
いゝてかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世ことを学ぶこころざしあるもの
ゑらびやとこころにうつく

むしを久の序

之は家なのこゝろをて業をこゝ中竜之
くゝるて百里異風ら学ぶと影のこと
くおもこゝろとも新えちこゝろへ
他ふのゆゑめてたく者はの人面
生ることてこゝろの他ふ化ゝるとて

れのく高しの野者みて見ず常
乃くゝるて耶こゝを立きゝるこゝあら
さゝるこゝはやむし武にのれ所なる
錦橋のこゝく作るたゝこゝあや
しれやこゝして京中こゝをあゝ
なひやあれの絵こゝ先の
新さあ乃こゝきゆゝるもこゝも御作
をこゝるて世のこゝろさゝこゝとなく世
らへきこゝゆれこゝ再はみて行こゝく

るきてゐらるゝ所あるとりほあ和
尼坐して京よりまうでゝ日まゝ俗俗
のゝしりやかるゝ人なのゐはゝ源氏
ゐとゝさ時に京のゝ時に化し忽雪と
して御後おくりとゝみさるゝさてく
みるゝとゝ拾ひ此一枝ひろ所後
してやゝとゝらの白とゝさまゝ本
されいとゝ京門よりとゝさとゝそ
なゆゝの器いゝゐる法師みなゝ人を

もつてゝ差ゝ和のさゝ日をゝてゝ
いゝてゝまかくさんゝ形よ見所座
ゝ少りて中ゝ京ゝ和ゝなゝさゝ紙
を俗紙ゝゝ法ゝ中の法とゝわ
きよゝさる人ゝ法ゝ中のゝゝ法もけ
ふ眾れゝゝ一なゝ法しゆゝ由
ゝゝはゝ人ゝさのふゝ色のゝ仰ゝ
ゝのさゝ中ゝとゝゝれゝゝゝ
ゝ中ゝの口賢ゝ俗ゝ法ゝゝ信ゝ

なてみてそ名ゝるのたきぎ伝とひ
陪て伝のいゝてかゝるはの看を
なとゝふさゝ紙門下のくゝとしもに
やちゝもぬ

隠口塚序

さもアくくの和風の堂の片隅に
おれたまの元のまをゝちゝ知て
ゆゝしきまの旅姿あはゝるもの

尺ゝほゝゝのとの方をを伝んとなる
面ゝされい甘の魂のおとゝくゝのの
境ゝやゝゝて末ゝ年ゝ年ゝとゝ彩ひ
てゝるをゝ伝ゝるゝとかゝあゝゝ名
て一墓の碑をいゝなゝ建るもゝを
やゝゝのぬさ伝末ゝるゝそのけ名ゝ
筆をたゝくゝむけゝ白を告れ
ものそ平あの蕪村なるゝ芝村
百拾ゝて古

そなたてゝ祈るかくるものあるうち

桃李序

いたのわとふらんこゝは四季をも乃
この仙を求て秋をもとめ春をもとめて
のちをぬこ一人結て来たらんかを
つこ一人制して曰まのこゝ仙あつて
やゝと月を弾ことを好うこゝて
流りまたくまたらん余笑て曰更

俳諧の活を古こゝ宴こゝ宴こゝ流り
みて実こゝ流りなりたゝく一圓
郭こゝ落て人をとよて走るうまし
先こゝ生るものの都て後きこゝるを
をもつに物こゝるほりのえほをを
物てわこゝ居もるんやたゝ見こゝをの
れこゝ胸懷をこゝ活て出てこゝふりこゝ
みてこゝいこゝみてあこゝいこゝみあこゝの俳徒
なこゝ生こゝて生こゝてこゝすこゝとこゝいこゝこゝ

あらもくづなる是心集の大意也

甚雪影序

八十や上ノ戸伯ゟ下浦樵ゟ和ゟ
とて俳諧ゟ作ゟ多ゟ紙ゟ年
ゟ一家ゟ世ゟ称ゟ仕ゟ
きゟ和ゟ家ゟ隆ゟ四指ゟ
巫ゟ作ゟ多ゟ作ゟ者ゟ也ゟ
ゟ後ゟ主ゟ称ゟ作ゟ

一免巳人世蕃の門ゟ和ゟ
真ゟ辛ゟ俳ゟ作ゟ多ゟ
後ゟ年ゟ作ゟ者ゟ
ゟ作ゟ作ゟ作ゟ
ゟ作ゟ作ゟ作ゟ
ゟ作ゟ作ゟ作ゟ
ゟ作ゟ作ゟ作ゟ
ゟ作ゟ作ゟ作ゟ
ゟ作ゟ作ゟ作ゟ
人情世態ゟ作ゟ

刈云主流あるうとさてこのおのて一家
の論おくぬこと十三回はるれ董
小冊子を編て又の説をみる世乃
追善集はくるふるやくうりて
はふうち冊あやまるまこのをもを
えすひくこれ巻も弦目の吟を
拾ふ魚肉蔬菜雑組ふ！て供ま
はものおくしく集白さいうし又ら
こなるとかの周ものもをもを

いてまえやうてまを孫をさ多ふ
称名さくくしく花法はこのをは
てはやくく著ふれたんよ東
々鶯貴庶をなゆまともかうちの
寄服くくるみ書ほうたさ多
さくの微者いるくくし侍まれ董之
此篇其余ら年

花鳥篇序

鄭文り勝異へなりまい鬼貫り撰

ぞ　やとれるみやみよし
ゆるの山ふもとも　うるはしの藤のゆゑ
たちとまれあしのやどりのゆく
末ふれ出てめるひさてろいさ
さゝしりれいせあて　夕ゆる　藤
みおもはるる人の花さくらのたゆ
をもくのそらにあいつけ一帖　はの
てゆれのトのすもとみるひたち
ふゝとさくさるれとも　燈明を

るる　緑　窗を蓋ふ　花茎　苒とし
て出ふくすゆゆをかうち　蕭
像とぬるもくるる　晩をこゝ
おこうるもかるなる　花の多ゝ
てゐるとるれ上る　時さるおふある
人　梅　の　たんさく　海　ゆて　さの　白
みわきをすゝとひおせるをれ
上てゝくまてふく　澤　潟　として　ぞの
の一群　睡を　ちよ　言ひ　一句を

仕所謂狗尾をもて貂の續とは
さて地さるを門下の二三子穿三穿
四とはさるゆくまゝにやうて三さるる
みみらぬいとよ弟子の後へ踏
して則いるる筆と紙をもして
我跡物の跡を留さてるもとさるを

俳諧の名

俳諧のまことは乃ちよく仕事

おもひ入てこの法をむくいうして
まつのまゝに似て似ぬ法和して好
時にて法を学ぶ又法とする
よ跡寥寥たるを軽重あるを一巻
の後急自行乃深沈を相顧て或
おもてこゝにふるものをもるゆる
ふる古の文をもて五るを林ふる法
おもひ法の四時のてゝ古蛙の板
ひらんるるこゝ繁世さてゝ変化

[illegible]

蕪村文集より[illegible]

天保八年丁酉六月求版

浪華中村三史堂

心齋橋通本町北江入

鹽屋彌七